〈原著論文〉

近代日本における「文化」概念の成立(2)-1
――大西祝の意義とマシュー・アーノルド『*Culture and Anarchy*』の問題性――

清　水　　均

抄　録

マシュー・アーノルドの『Culture and Anarchy』がどのように日本に移入され，蘇峰がこれをどのように受容したかという課題を扱う。今回の論考では「日本に初めてマシュー・アーノルドを紹介した」とされる大西祝の存在意義，特にアーノルドの「culture」を「文華（文化)」と訳出したことの意味と，これに関わるものとして『Culture and Anarchy』が提示した「culture」概念の問題性について論じている。

キーワード：カルチャー，文化，教養，中流階級，マシュー・アーノルド

はじめに

「近代日本における「文化」概念の成立」と題した本論考の目指すところについては，前回の「近代日本における「文化」概念の成立（1）―「文明 / 文化」から「文化 / 教養」へ―」（『聖学院大学論叢』第 21 巻第 2 号 2009 年 3 月）の中で，「日本において「文化」がどのように「国籍」を必要とし，超越性を抑圧することになったのか，そして，その「文化 / 国家」の政治性が露わな形ではなく，隠蔽され，無意識のレベルで機能し，「日本独自の文化」「日本固有の文化」という「文化 / 国家」のありようが違和感なく受け入れられ，しかもその一方で「文化」が「何か価値のあるもの」というリベラルな相貌を見せるようになったのか，その歴史性を検証したい。」と記した。そして，近代における「文化」概念の成立に深く関わる陸羯南と徳富蘇峰の二人の思想家――ともに明治 20 年代前後の同時代に文筆活動をスタートさせ，多くの読者を獲得していた――を中心的に取り上げ，前者が「文化 / 国家」の図式を明示した最初の存在であり，後者は自らの論を福澤諭吉の「文明論」に対置させる「戦略」において，「教養」の語をキーワードとして駆使する展開の中でやがて「文化」概念と出会い「文化 / 教養」の図式を提示した，と結論づけた。

蘇峰におけるこの「文化 / 教養」の図式の成立にはマシュー・アーノルドの「culture」概念が

人文学部・日本文化学科　論文受理日 2016 年 6 月 30 日

深く関与すると考えられるが，前回の論考ではそのことを示唆するに留まり，検証には至っていない。また，陸と蘇峰の「文化論」，更には福澤の「文明論」についても今少し確認すべき事柄が残っているが，まずはアーノルドの『Culture and Anarchy』がどのように日本に移入され，蘇峰がこれをどのように受容したかという課題を扱いたい。そして，今回の論考では「日本に初めてマシュー・アーノルドを紹介した」とされる大西祝の存在意義，特にアーノルドの「culture」を「文華（文化）」と訳出したことの意味と，これに関わるものとして『Culture and Anarchy』が提示した「culture」概念の問題性について論じていくことにする。

Ⅰ．大西祝のアーノルド受容

木村毅によれば，日本に初めてマシュー・アーノルドを紹介したのは大西祝（操山）である。木村は以下の二つの文章でそのことについて述べている。

> 大西操山は，東大哲学科はじまって以来，最高点をとったという俊才で，明治年間，仰いで真に高しの感ある唯一の哲学者であった。学生時代，「批評論」一篇をもって論壇にあらわれ，日本におけるマシュー・アーノルドの最初の紹介者となった（木村毅「日本の文壇と英文学」『日本の英学100年明治編』昭和43年10月　研究社）

> アーノルドは明治二十年に，大西操山が「六合雑誌」に発表した彼の処女論文「批評論」に引用したのが，日本最初の紹介で，それから民友社の人々が盛んによんだ。私は蘇峰翁から，操山にアーノルドを教えられ，翁は「カルチュア・アンド・アナーキイ」の中の「スイートネス・アンド・ライト」や「ヘレニズム・アンド・ヘブライズム」など，くり返して愛読した時代があるという話を，きいたことがある。」（木村毅『丸善外史』昭和44年2月　丸善）

大西祝経由で蘇峰をはじめとする民友社の面々がアーノルドを「盛んに」読んだという記述は見逃せないところである。しかも『Culture and Anarchy』を「くり返して愛読した」とあるのは蘇峰の「文化／教養」論形成への『Culture and Anarchy』の関与というものを保証しているようで貴重な「証言」と言えるが，ここではそのことはひとまず置くこととし，まずは大西祝とマシュー・アーノルドとの関係性を辿ることにする。

実は木村が「明治二十年に大山操山が「六合雑誌」に発表した彼の処女論文「批評論」に引用した」としたのは明治21年5月に「国民之友」に発表された「批評論」というのが正しく，しかもこの「批評論」では直接アーノルドからの引用はない。そのことを踏まえ佐藤善也は，木村の記述とは異なり，大西によるアーノルド紹介は「批評論」の発表よりも早く，明治20年2月28日に出

た「哲学会雑誌を読む」(「六合雑誌」）であると指摘している。(「「池塘学人」とは誰か」佐藤善也『透谷・操山とマシュー・アーノルド』1997 年 7 月　近代文芸社）

> 予輩おもへらく文学の歴史には二種の時代ありと即ち創造の時代と批評の時代なり創造の時代は新思想の社会に流通して人心の非常なる活動をなす時にのみ現出するものなりエリサベス時代の英国文学史に於ける，ゴェーテ，シルレル時代の独乙の文学史に於ける其著しき例なりマシュー，アーノード曰へらく第十九世紀の前半に於て英国文学の再び其華を開かんとしたりしに間もなく萎へ其結果は遥に当時の独乙の文学に劣りたるは其故他なし英国には文華の根本種子となるべき思想の乏しかりしが故なりと（「哲学会雑誌を読む」傍線は原文通り。ただし二重傍線は論者による。）

この文章は「池塘学人」なる人物が記述しているのだが，佐藤はこの「池塘学人」は大西祝のことであるとする。その根拠の一つとして大西の「批評論」の内容とこの「池塘学人」なる人物の記述が内容的に重なることをあげている。以下に「批評論」の該当箇所の一部を引用する。

> 彼の「エリザベス時代」の，英国の文学に於ける，又彼の「ゴエーテ，シルレル時代」の，独逸の文学に於ける，其例古来幾何かある，斯の如き創作時代の縁由となる者，固より一にして足らずと雖も，一般の国民，新鮮の思想を呼吸し，活溌なる精神的運動を始むるに於いては，其国の文学望むらくは創作の時代に近からん，此時に当り社会に飛奔する種々雑多の思想を判別批評して其真価を明にし以て当時の思想界に先だつ者は蓋し批評家なり，此時に当り草を耨り土を反し種子を下して以て将来の文華を招き来す者は蓋し批評家なり，将に来らんとする文華の遅速と其情態は大に之に先だつの批評如何に関係す，両者の相ひ関する所太だ親密なるを知るべし（傍線は論者による。）

「エリザベス時代のイギリス文学」と「ゲーテ，シラー時代のドイツ文学」を対照させているところや，「創造（創作)」と「批評」を対置させているところ，更にはともに「文華」を文学と関連づけて論じているところは二つの文章が類似していることの根拠となり，総じてこの二つの文章は語句，論旨ともに近似していると言ってよい。無名時代の大西が「池塘学人」という匿名性を保持した名前で「哲学会雑誌を読む」を書き，その後，持論を発展させたものを「批評論」として発表した，ということであろう。

ところで，「哲学会雑誌を読む」でアーノルドの言葉として引用された箇所について佐藤はこれを『The Function of Criticism at the Present Time』（1865 年）の以下の部分の大意をまとめたものと推測する。

Such an atmosphere the many-sided learning and the long and widely-combined critical effort Germany formed for Goethe, when he lived and worked. There was no national glow of life and thought there as in the Athens of Pericles or the England of Elizabeth. That was the poet's weakness. But there was a sort of equivalent for it in the complete culture and unfettered thinking of a large body of Germans. That was his strength. In the England of the first quarter of this century there was neither a national glow of life and thought, such as we had in the age of Elizabeth, nor yet a culture and a force of learning and criticism such as were to be found in Germany.（傍線論者）

（佐藤による意訳）

ドイツの多方面の学問と，長期間広範囲にわたって力を協せて来た批評的努力とが，ゲーテのために作りあげたものは，このような（書物と読書によって作られた，類似の）価値ある雰囲気である。そこにはペリクレス時代のアテネやエリザベス朝の英国のような国家的栄光はなかった。これは詩人（ゲーテ）の弱みであった。しかし，それと等価のものが，一体としてのドイツ人たちの完全な教養と自由な思考の中にあった。それは彼の強みであった。今世紀初頭二十五年間のイギリスには，エリザベス朝時代に持ったような，国家的栄光に包まれた生活や思想もなければ，かつてドイツに見出されたような，教養や学問の力，批評の力もない。（傍線論者）

佐藤の論点を整理すると，まず大西は「哲学会雑誌を読む」（明治20年2月28日）でアーノルド『The Function of Criticism at the Present Time』の大意を引用する，そしてこれをベースにしつつ後に「批評論」（明治21年5月）を書いて自らの論を発展させる，従って，「批評論」においても同様にアーノルドの思想が反映されることになる，ということである。

大西は「批評論」において，「文華」を招来する役割を批評家が担うことの意義を説いているのであるが，引用部の直後に批評の「職分」について，「批評の創作に関する所の如何を知れば，其職分は従て推知し得らるべし，其職分は他なし，一言を以て竭すことを得，曰く在(あ)る物を在の儘に見ること是れなり，此事たる，至て為し易きが如く見ゆべけれども，一たび深く其事の真に何たるを考ふれば，其極めて難事なるを認識し得べし，（中略）事物の相を認識するハ恰も鏡面の物象を受くるが如く，曇(くもり)なく凹凸なき者にして始めて其真相を写し得べく，智力の発達圓満，心情の感応宏寛なる者にして始めて其真相を認識し得べし」（傍線論者）と続けていることから，これが『Culture And Anarchy』においても繰り返し強調されるアーノルドの有名な提言，「対象をありのままに見ること」（アーノルドは「to see things as they really are」「to see things as they are」「seeing things in their reality」等適宜表現を微妙に変えている）に拠っていることが推測される。そして，

このことは「批評論」において大西がアーノルドの言説を援用する形で文章を組み立てていることの傍証となりえるし，大西がアーノルドの「culture」概念を掌中のものとしていたことをうかがわせるものである。とすれば木村の誤りも「批評論」というタイトルのみのことであり，「アーノルドは明治二十年に大西操山が「六合雑誌」に発表した彼の処女論文「批評論」に引用したのが，日本最初の紹介」としたのは，「六合雑誌」という発表雑誌名も明示されていることからすると，木村がこの時点で「池塘学人」なる存在が大西であることを見破っていたということもできる。

いずれにしろ，日本におけるアーノルド紹介の始発期に大西祝が重要な役割を担っていたことが木村及び佐藤の指摘から明らかにされたわけであるが，ここで注目したいのは，大西がアーノルドの「culture」を「文華」と訳出していることである。そのことは上記佐藤による意訳の訳文が「culture」を「教養」と訳していることと比較しても際立った特徴を示しているということができる。では，佐藤が訳語とした「教養」は大西の「文華」と，あるいは現代の「教養」と同義とすることができるであろうか。

例えば，三宅雪嶺にも次のような「文華」の用例がある。（引用はいずれも『哲学涓滴』明治 22 年 11 月より）

> 而してロックのヴォルテルを始めとし仏国の文華を感化せるは，ライプニッツのヴヲルフを始めとし仏国の文華を風動するに似たり

> 更に眸を転ずれば，伊国の旧学を洗てロスミニの形而上学を発揚するあり，仏国の文華に依りてコントの実験哲学を宣言するあり（以上，傍線は原文通り。二重傍線は論者による。）

これらの用例は当時としてはわりとよく使用されていて，『広辞苑』によれば「文明のはなやかなこと」「文明の立派さ」と定義されている。この意味で取れば「文華」は「文明の華」といった意味で，「文明」とほぼ同義とみなすことができる。しかし一方で，三宅は同じく『哲学涓滴』の中で「文化」という語も使用している。

> 有名なる希臘の繁華，称するに足らざるに非ずと雖も，其れ能く周の郁々乎たる文化に若かんや

> 文化未だ普からず，学理猶ほ明かならざる今日に於いて（以上，傍線論者）

これらは現在の意味での「文化」と同義ともとれる一方で，「文明」とほぼ同義とみなすことも可能で，「文化」≒「文明」，「文華」＝「文明の華」ということで，「文化」も，また「文華」も，

「文明」概念から明確な意味においては分岐していないと言えるし，それゆえに現代の「教養」とは異なる意味として使用されていると言える。

このほか，明治期における早い時期の「文華」の使用例としては服部撫松の『東京新繁昌記』（明治7年）に「固陋の夢醒めて，開化の春に遇ふ。文華の爛漫，発明の光彩，内外眼に触るる美事多し。」があり，明治20年代前後にも三宅の他にも例えば坪内逍遥「夫れ我国は文華の国なり」（「為永春水の批評」明治19年2月「中央学術雑誌」）や，饗庭篁村「文華煥發の明治の今も棄てられさるのみかは」（「春色梅こよみ（為永春水著）」明治20年8～9月「出版月評」）等の例もある。また，「文華」ではなく「文花」の用字もあり，北村透谷には「東洋の文花国今日を以て命脈を決せんとするか」（石阪ミナ宛書簡明治21年1月21日）という用例がある。（以上，傍線論者。以下同様）

こうして見ると，当時使用されていた「文華」の語はいずれも「文明」と同義と解釈することもできるのであるが，問題の大西の「文華」についてはこれらとは異なり，明らかに「文明」と同義で使ってはいない。何故なら大西はほかならぬアーノルドの「culture」の訳語として「文華」をあてており，このアーノルドの「culture」は「文明」の意味とは異なる概念，というよりも対抗概念として提示されているからである。後で詳述するが，よく知られるようにアーノルドの「culture」概念は，特に『Culture and Anarchy』に示されているように，「文明」の対抗概念として使用されているのであり，従って，ここでの「文華」が「文明」と同義ではないことは明らかである。大西がここで何故「文化」ではなく「文華」を用いたのかは定かではないが，アーノルドの「culture」を「文明」の対抗概念として正確に捉え，それを「ブンカ」という語に変換していることが重要なのである。

しかし，その一方で，大西は同じ「批評論」の中で「文化」の語も使用してもおり，特に，以下の二つ目の引用からは大西が「文化」もまた「文明」とは異なる意義を持つものとして使用していることがわかる。

> 我国文化の先導者たらんと欲するの批評家は宜しく活眼を開て今日の思想界を洞察せよ，善く其真相を看破し得る者ハ是れ予が所謂る批評家たるとことを得る者なり

> 向後我国文化の基礎となり，其動力となるの思想に三種あり，（中略）夫れ西洋今日の文明は希臘及羅馬の文化を基本となせり，其思想界の最高位なる哲学ハ希臘の学問と猶太（ユダヤ）の思想との相ひ合して生（な）れる結果なり，

> 世間之を論するの士に乏しからざるべし，然れども西洋文化の裏面なる其思想界の大勢に到ては，善く之を知り善く之を批評し善く之を通弁する者幾何かある，（以上，傍線論者）

大西においては「文華」≠「文明」,「文化」≠「文明」と捉えられていたのであるが，アーノルドの「culture」の訳語としては「文華」を，そしてそれ以外の文脈では「文化」をというように使い分けられていると解釈することも可能であり,そうであれば大西においては「文華」と「文化」は，微妙ではあるにしても異なる語として認識されていたということになる。いずれにしろ，大西にとって，また，当時にあって「文華」という語は,「文化」が「文明」から分岐し，現在の意味での「文化」に移行する過渡的な使用法であったということができるだろう。

「日本におけるマシュー・アーノルドの最初の紹介者」としての大西における「culture」概念が以上のようなものであったとすれば,「操山にアーノルドを教えられ，翁は「カルチュア・アンド・アナーキイ」の中の「スイートネス・アンド・ライト」や「ヘレニズム・アンド・ヘブライズム」など，くり返して愛読した時代があるという話」を木村にした徳富蘇峰はこのアーノルドの「culture」をどのように受け止めたのであろうか。次の課題は蘇峰におけるアーノルド受容の軌跡を辿ることになるが，その前提作業としてアーノルドの「culture」概念の内容を『Culture and Anarchy』において確認しておきたい。

Ⅱ．マシュー・アーノルド『Culture and Anarchy』の問題性

(1)「culture」と階級問題

マシュー・アーノルド『Culture and Anarchy』（1869 年刊）は，よくいわれるように産業革命のもたらしたイギリスにおける様々な社会変化，特に貧富の差による社会の二極化によって生じたラッダイト運動をはじめとする大規模な機械打ちこわし運動や，普通選挙権を要求するチャーチスト運動，あるいは貧民街，煤煙による公害問題等の社会状況に対し，アーノルドがこの「無秩序」な状況に処すべき方策の核心として「culture」の必要性を説いた論考である。「序文」においてアーノルドはまず，

> The whole scope of the essay is to recommend culture as the great help out of our present difficulties;（引用は『Oxford World's Classics』版『Culture and Anarchy』2009 年 6 月 15 日発行による。以下の引用は全てこれによる。）
>
> 論文の全体の目的は，教養を，英国の現在の窮境を大いに救うものとして，推奨することにある。（岩波文庫『教養と無秩序』多田英次訳　2003 年 2 月 21 日発行による。P. 10-11。以下に引用する訳とページ数は全てこれによる。）

と，この論の主旨を提示し，引き続き「culture」とは何かということを簡潔に記述する。

culture being a pursuit of our total perfection by means of getting to know, on all the matters which most concern us, the best which has been thought and said in the world, and, through this knowledge, turning a stream of fresh and free thought upon our stock notions and habits,
教養とは，われわれの総体的な完全を追求することであり，それにはまず，われわれに最もかかわりの深いすべての問題について，世界でこれまでに考えられ語られた最善のものを知り，さらにこの知識を通じて，われわれのおきまりの思想と習慣とに，新鮮な自由な思想の流れをそそぎかけるようにする。(p. 11)

アーノルドは，「教養」とは「総体的な完全を追求すること」だとする。そして，以下に見るように「教養」は「完全への努力」であり「真の人間的完全」を目指すものであるとする。

Culture, which is the study of perfection, leads us, as we in the following pages have shown, to conceive of true human perfection as a harmonious perfection, developing all sides of our humanity; and as a general perfection, developing all parts of our society.
完全への努力である教養は，これからさきの頁に示したように，真の人間的完全とは，人間性のあらゆる面を発達させる，円満な完全であり，社会のあらゆる部分を発展させる，一般的完全であると考えさせる。(p. 17　傍線は原文通り。以下同様)

ここで留意すべきは，「人間性のあらゆる面を発達させる，円満な完全」と「社会のあらゆる部分を発展させる，一般的完全」とが並置されていて，「教養」の目指す「完全」においては，「個人レベルにおける人間性の完全」＝「円満な完全」が「社会レベルにおける完全」＝「一般的完全」に波及することが期待されていることである。そしてこの「一般的完全」はやがて「国家レベル」ひいては「人類」における「完全」を要請することになる。

culture suggests the idea of the State. We find no basis for a firm State-power in our ordinary selves; culture suggests one to us in our best self.
そして教養は国家の観念を示唆する。われわれはわれわれの通常の自己の中にはしっかりした国家権力の基礎を見いださない。そして教養は，われわれの最善の自己の中にそれがあると示唆する。(p. 120)

individual perfection is impossible so long as the rest of mankind are not perfected along

with us.
個人的完全は人類の残りのものがわれわれとともに完成されないかぎり，不可能である。(p. 241)

Again and again I have insisted how those are the happy moments of humanity, how those are the marking epochs of a people's life, how those are the flowering times for literature and art and all the creative power of genius, when there is a national glow of life and thought, when the whole of society is in the fullest measure permeated by thought, sensible to beauty, intelligent and alive. Only it must be real thought and real beauty; real sweetness and real light. Plenty of people will try to give the masses, as they call them, an intellectual food prepared and adapted in the way they think proper for the actual condition of the masses. The ordinary popular literature is an example of this way of working on the masses. Plenty of people will try to indoctrinate the masses with the set of ideas and judgments constituting the creed of their own profession or party. Our religious and political organisations give an example of this way of working on the masses. I condemn neither way; but culture works differently. It does not try to teach down to the level of inferior classes;
生活と思想とが国民的に輝くとき，社会の全体が十二分に思想に滲透され，美に対して鋭敏であり，英知にみちいきいきしている時が，いかに人類の幸福な瞬間であり，いかに国民生活の注目すべき時代であり，いかに文学と美術と天才のすべての創造力とのための花さく春であるかを，わたくしはくりかえし主張した。ただ，それはほんものの思想とほんものの美，ほんものの優美とほんものの英知でなければならない。多くの人びとが，かれらのいわゆる大衆に，大衆の現実の状態に適しているとかれらが考えるように調味された知的食物を与えようとするだろう。ふつうの大衆文学は大衆へのこのような働きかけ方の一例である。多くの人びとがかれら自身の職業あるいは党派の信条を構成するある思想と判断とを大衆に教えこもうとするだろう。わが国の宗教団体・政治団体は，大衆へのこのような働きかけ方の一例を示している。わたくしはこのいずれの働きかけ方も非難しない。しかし教養は異なった働きかけをする。それは下級の階級の水準までおりて教えようとはしない。」(p. 87)

ここではあえて引用順を記述の順番に合わせていない。というのは，アーノルドが「culture」の概念を個人のレベルから国家のレベルに敷衍して捉えていることにおいて，そこには二つの問題が派生して生じており，それが最後の引用部に顕著に示されていることを明示するためである。

その一つは「国家」を論じることは当時のイギリスにおける階級の問題に触れることに繋がると

いう点であり，その階級格差を「culture」がいかに止揚できるのかという問題である。アーノルドが提示した有名な区分，「野蛮人」（貴族階級），「俗物」（中産階級），「大衆」（労働者階級）の概念が当時のイギリス社会に存在したそれぞれの階級を指すのであるが，アーノルドはこれら全ての階級において「生活と思想とが国民的に輝く」ことを要請する。その一方で，「culture」は「下級の階級の水準までおりて教えようとはしない」と言う時，それはアーノルドが言う「culture」が，言わばエリートのものとしての「高級文化（ハイカルチャー）」の性格を持つということを意味していることになるのであるが，ではそうした性格を持った「culture」を「国民的に輝く」ように浸透させることはいかにして可能となるのか，言い換えれば，「ほんものの優美とほんものの英知」はいかにして「国家の観念」の内に確保されるのであろうか。実際アーノルドは「階級の観念」をこえて「国家の観念」に至る必要性を繰り返し強調しているのである。

結論的に言えば，アーノルドは「各階級の中」に，それを担う層の存在を想定し，その感化力に期待する。

> But in each class there are born a certain number of natures with a curiosity about their best self, with a bent for seeing things as they are, for disentangling themselves from machinery, for simply concerning themselves with reason and the will of God, and doing their best to make these prevail; －for the pursuit, in a word, of perfection. To certain manifestations of this love for perfection mankind have accustomed themselves to give the name of genius;（中略）culture being the true nurse of the pursuing love, and sweetness and light the true character of the pursued perfection. Natures with this bent emerge in all classes, －among the Barbarians, among the Philistines, among the Populace. And this bent always tends, as I have said, to take them out of their class, and to make their distinguishing characteristic not their Barbarianism or their Philistinism, but their humanity.（中略）Therefore, when we speak of ourselves as divided into Barbarians, Philistines, and Populace, we must be understood always to imply that within each of these classes there are a certain number of aliens, if we may so call them－persons who are mainly led, not by their class spirit, but by a general humane spirit, by the love of human perfection;
>
> しかし，各階級の中に，自分の最善の自己に対して好奇心をもついくたりかの人びと，事物をあるがままに見ようとし，自分を機械からきりはなそうとし，ひたすら道理と神の意志とを知ってそれらをひろめることに最善をつくそうとする――一言でいえば，完全を追求しようとする傾向をもついくたりかの人びとが生まれる。この完全の愛好のある発露に対し，人びとはこれまで天才という名称を与えてきた。（中略）そして教養は，それの追求愛の真の乳母であり，優美と英知とが追求される完全の真の性格なのである。この性向をもつ人びとが

すべての階級の中に――野蛮人の中に，俗物の中に，大衆の中に現われる。そしてこの性向は常にかれらをかれらの階級からひきはなし，かれらの野蛮人根性あるいは俗物根性ではなくかれらの人間性をかれらの著しい特徴にする傾向がある。（中略）それゆえ，われわれ自身が野蛮人と俗物と大衆とに区分されるという時，これらの階級のおのおのの中にいわばいくたりかの異邦人――自分の階級的精神によってではなく主として一般的な人間的精神，人間的完全の愛好によって導かれる人びと――がいるということと，この人数は増しも減らしもできるということを，われわれは常に黙認していると了解されなければならない。（pp. 135–136）

考えようによっては随分と楽天的だとも言えるが，「野蛮人」（貴族階級），「俗物」（中産階級），「大衆」（労働者階級）の各階級において「完全を追求しようとする傾向をもついくたりかの人びと」が存在し，そうした人びとに対し「culture」の「優美と英知」が働きかけ，次の引用に見るように，やがてはそれが「国民」に「伝播」「感化」し，更にはそのことによって「国家」が形成される，そのようにアーノルドは期待したのである。

but the question is, the action of the State being the action of the collective nation, and the action of the collective nation carrying naturally great publicity, weight, and force of example with it, whether we should not try to put into the action of the State as much as possible of right reason, or our best self,
しかし問題は，国家の行動は集団的な国民の行動なのであり，集団的な国民の行動は自然と大きな伝播力と権威と感化力とをともなうものであるから，われわれは国家の行動のなかにできるだけ多くの最善の自己あるいは正しい道理をもろ（ママ）うとしてはいけないかどうかである。正しい道理は，このようにして新しい力と権威とをもってわれわれのところへもどってくるであろう，目に見えるようになり，すがたと感化力とをもつであろう，われわれがしばしば単にわれわれの通常の自己だけになりたくなるとき，われわれの生まれながらの低俗趣味に負けずにむしろそれに抵抗する習慣を強化する助けとなるであろう。（P. 154–155）

「われわれの生まれながらの低俗趣味に負けずにむしろそれに抵抗する習慣を強化する助け」となる「正しい道理」によって，「集団的な国民の行動」ひいては「国家の行動」をもたらすものとしての「culture」。そうした「culture」の「感化力」を担う層としてアーノルドが本来期待するのは自らもそこに属するところの「中産階級」（middle-class）であったであろう。

and I begin to ask myself if we shall not, then, find in our middle-class the principle of

> authority we want, and if we had not better take administration as well as legislation away from the weak extreme which now administers for us, and commit both to the strong middle part.
>
> そこでわたくしは自問し始める，それではわれわれの中流階級の中にわれわれの求めている権威の原理は見いだせないであろうか，今われわれに代わって統治している力弱い少数貴族から立法も行政もとり上げてともにこれを力強い中堅階級にゆだねるほうがよくはないであろうか。(P. 109)

しかし，「middle-class」の現状は「俗物根性」に陥り，視野狭窄的に自らの利権追求から免れない存在でしかなかった。それゆえ，アーノルドはこの論の中で「middle-class」への期待をこれ以上に明言することはしていない。

「国民の創出」による「近代化」は明治維新以来の日本においても課題であり，その課題に対し中核となる層として「middle-class」に期待が寄せられたのは福澤諭吉，徳富蘇峰等においても同様であったし，そこに「教育」の必要性を求めたことも同様であった。それゆえにこそ，特に蘇峰の思想を検討するに際し，アーノルドを如何に受容したかということが検証課題となるのであるが，それについては稿を改めて論じたい。また上に見たアーノルドの論が今で言う「サブ・カルチャー」の概念を胚胎しているという点で現代の文化に連なる問題系を有しているといえるのだが，ここではアーノルドが「サブ・カルチャー」とも言える「culture」をも念頭に置きつつ，これに対置させる形で「高尚な culture」の必要性を指摘していることを押さえておくに留めておきたい。

(2)「culture」と「教養」「文化」概念

では，アーノルドが「culture」の概念を個人のレベルから国家のレベルに敷衍して捉えていることにおいて派生して生じた二つ目の問題とは何か。結論から言えば，個人と国家という二つのレベルに「culture」を適用する時，「culture」という語義自体に二つの階層が発生しているのではないかということである。換言すれば「culture」が担う「意味の階層性」ということである。例えば矢野峰人は『近英文藝批評史』(矢野峰人昭和18年12月　全国書房)の中でアーノルドの「culture」を論じる時，これに「教養」の語をあてて次のように言う。

> 『教養と無秩序』に於て詳説せる所に従へば，「人間性の完成」(true human perfection) の謂であり，人間性の完成とは，われわれが有する一切の能力を，一のために他を犠牲にするが如き事無く，最も圓満完全に発達せしむるを言ふ。換言すれば，われわれの精神生活をたえず豊富にし，その能力を満遍無く伸展せしめ，以て叡智と美との不断の成長を圖るにある。それは，全人格の充実し調和ある拡大である。而して，斯かる「完成」を研究する事，“the

study of perfection”を，アーノルドは“culture”（教養）と呼ぶ。

それでは，かかる完成は如何にして可能であるか――それは，換言すれば，教養とは如何なる活動を言ふのであるかといふ事であるが――それは，最も優れたる思想を学び，己が能力を遺憾無く発展させ，以て圓満なる人格を築き上げようとする努力に外ならない。ところで，一切の人物・思想・作品等に現れたる完全の観念を闡明して人に示し，人をして迷ふこと無く之に拠らしむるものは批評ではないか。即ち，批評はこの世に於ける最善の思想を知り之を他に伝へる事により文化の段階を高め，教養は批評の齎せる結果を摂取同化する事によつて自己完成といふ理想の実現に努力するものである。（中略）アーノルドは，斯くの如く，人生のための藝術を鼓吹するのであるが，彼が完全の観念を批評の標準乃至対象にしたといふ事は，彼が人間の外部にあるものを持ち来つたのではなく，むしろ人間の内部にあるものを明るみに出し，これによつて一切を照らさんとした事である。何となれば，人間の一切の活動は，自己保存と自己拡張の本能より発するもの，これによつてはじめて文化の存在も見られるのであるから，これを否定し之に叛くものは自己破壊的にならざるを得ない。この点に関する彼の意見は Mixed Essays『随筆雑纂』の序にも見られ，『教養と無秩序』の根本思想と相照応し，また『アメリカ講演集』の思想にも合致するのである。

而して，これは個人に於ける生活の理想なのであるが，この全体に亘つての圓満なる発達といふ事は，一般社会生活に於ても亦理想とさるべきもので，即ち，人と人との関係にあつては自己のために他人を犠牲にするが如き事無きと共に，社会の各部門に於てはそれを満遍無く圓満に発達せしむる事，これが真の教養の到達せんとする理想である。（中略）自己生命の拡大と充実とに努むる事によつて人間性の完成にと漸次向上して行く生活――かかるものこそ，アーノルドの意味せる「教養」である。

二箇所から引用したが，ここでまず注目したいのは最初の引用の中で「批評はこの世に於ける最善の思想を知り之を他に伝える事により文化の段階を高め，教養は批評の齎せる結果を摂取同化する事によつて自己完成といふ理想の実現に努力するものである。」「何となれば，人間の一切の活動は，自己保存と自己拡張の本能より発するもの，これによつてはじめて文化の存在も見られるのであるから，これを否定し之に叛くものは自己破壊的にならざるを得ない。」と言い，「教養」と「文化」の概念を並立して捉えているところである。

矢野の言葉を言い換えれば「批評とは文化の段階を高め，教養はそれを摂取同化することによって自己完成を目指す努力のことである」となる。あるいは「人間の一切の活動は教養によって自己保存と自己拡張を図ることによって文化の存在を認めることができる」ということになる。即ち，ここでは「教養」と「文化」との相互関係性が「社会における文化の度数が個人の教養を高め，逆

に個人の教養が文化の価値を発見させる」という階梯的なものとして提示されているのである。とすれば，二番目の引用で矢野が記している「個人に於ける生活の理想」が「一般社会生活に於ても亦理想とされるべき」とした時，矢野は前者を「教養」の機能として捉え，後者を「文化」として捉えていることになるのではないか。このことは即ち，アーノルドの文章においても同様で，先に述べたようにアーノルドが「culture」の概念を個人のレベルから国家のレベルに敷衍して捉えているということにおいては「culture」の語も二つの階層を以て使用しているのではないかということが想定されるのである。無論英語の「culture」は一語であるが，この一語の中に二つの意味を含意させているのではないかということである。岩波文庫版の訳者多田英次は「culture」を「教養」の一語をもって訳出しているが，アーノルドの含意を訳に反映させるとすれば，矢野が使用しているように「文化」という語をあてることが可能な部分があったのではないか。『culture and anarchy』が「文化と無秩序」とも「教養と無秩序」とも訳される由縁もここにあると考える。

このことに関連して富山太佳夫は『文化と精読―新しい文学入門―』（名古屋大学出版会　2003年9月）で，「明らかにアーノルドはculture なるものに，個人の「調和のとれた完成」を目指す部分（恐らくこれは教養と訳していいだろう）と，社会の「全体的な完成」をめざす部分（これを何と訳すべきだろうか，かりに文化と訳してもほとんど用をなさないはずである）の表裏一体をなす二つの面を認めている。彼の言うcultureは個人と集団･社会の双方に同時に関わるものであって，その意味合いは教養，文化のいずれかの語によってもカバーしきれないのだ。（中略）彼が模索して発見したのは個人と社会と国家をつなぐ新しい概念であった。」と述べているが，「集団・社会」に関わるものとして，あるいは矢野が言う「真の教養の到達せんとする理想である」の「到達せんとする」地点をも含めた概念として，アーノルドは「culture」の語をもって説いているのではないだろうか。

このようにアーノルドの「culture」が含意する語義の階梯に着目した時，先述した「個人レベルにおける人間性の完全」＝「円満な完全」と「社会レベルにおける完全」＝「一般的完全」との関係性も，「教養」と「文化」との機能（作用）における相互関係として説かれていることが見えてくる。

本論は次にこのことを検証することになるが，もはや紙数が尽きた。稿を改めて論じることとしたい。

The Generation of "*Bunka*" in Modern Japan (2)-1: The Significance of Hajime Onishi's Work in Relation to Problematic Characteristics of Matthew Arnold's Culture and Anarchy

Hitoshi SHIMIZU

Abstract

This paper examines how Matthew Arnold's *Culture and Anarchy* was introduced to Japan and how the resurrection of Japanese high literary culture at this time affected the reception of *Culture and Anarchy* in Japan. I focus on the meaning of "culture" in Japan in relation to the significance of Hajime Onishi, said "to have introduced Matthew Arnold to Japan for the first time." Particular attention is paid to the problematic translation of Arnold's concept of "culture," denoting "brilliant civilization／high culture," into Japanese, using the word 文華 ("brilliant／high culture") rather than the generic 文化 ("culture").

Key words: Culture, *Bunka, Kyoyo* (liberal arts), middle-class, Matthew Arnold